

名軍師

## 黒田官兵衛②

一龍斎貞花

講談師

竹中半兵衛とともに、秀吉を天下人に押し上げた黒田官兵衛よしたか孝高

官兵衛は、天文15年（1546）11月29日姫路において誕生。黒田の家は家伝の目薬を売り歩き財を成し、「目薬屋」と比喩されるが、土地をどんどん手に入れ多くの使用人を雇い、こうして有力な土豪になり小寺氏の目にとまり仕官、主人の姓をもらって小寺を名乗ったが、判りやすいので黒田で通します。

幼い頃から利発で和歌や、茶道を習い武将にふさわしい教養を身につけていきました。17歳で初陣兜首を挙げる手柄を立て、23歳の時播磨の領主櫛橋家の娘幸圓17歳を妻に迎え、長男松寿丸、後の長政誕生。領主との婚姻関係によって勢力を伸ばし、30歳で小寺家の家老に。官兵衛の進言で、小寺が織田の配下となった

ことが知れるや、別所や毛利が攻め込んでくると、毛利に内通する者ありという有様。官兵衛の作戦で敵を蹴散らしたが正に四面楚歌。

「小寺から人質を」という信長の命に「私の倅松寿丸を」秀吉が預り自分の城長浜へと送り、妻のねねが10歳の松寿丸をしつかりと教育します。

天正5年信長は、中国攻めの総大将に羽柴秀吉を任命、「筑前如き成り上りが中国攻略の大將とは破格すぎる」と重臣たち、中でもライバルともいべき明智光秀、そして伊丹城の荒木村重は面白くない。官兵衛が先導役、上月城を落とすや57年もの間親子三代にわたって毛利と戦いを続けた尼子勝久、股肱の臣山中鹿之助が念願の上月に入城。

すると官兵衛の説得で、毛利から織田へ隨身を誓った三木の別所長治が、永年信頼関係のある毛利へ再び協力を宣言するや、近隣の大名こぞって毛利方へ。22歳の若さながら長治頑強に抵抗。いかに軍師半兵衛、知恵者官兵衛ありといえどびくともしない。ここぞと毛利の大軍が上月を包囲、吉川元春、小早川隆景、宇喜多直家の大軍を向うに廻して無謀な戦いは出来ない。救援を頼んだが、「上月一つぐらいいはお見限り遊ばし、当面の敵三木城を一途に攻めるがよろしかろうと存じます」滝川一益、佐久間信盛ら織田家譜代の言葉に信長も同意。

この時秀吉は、「尼子、山中を見殺しにせよとは余りに忍び難いぞ」半兵衛静かに「安土のご命令には背けません」

かくして上月落城。「尼子の再興を期し、織田軍にすがって戦い功を立てた者を見殺しとは信長公の名折れ、後の世のそしりとならねばよいが」と嘆息した秀吉は、三木城に対する長期戦を覚悟。

月白く輝く一夜、秀吉の陣営に秋が訪れておりました。

突如半兵衛が「ウッ」「いかなされました、アッ血が」口を押えた懐紙が赤く染っておりました。半兵衛はその夜から熱を発して寝込んでしまった。

### 村重謀反、官兵衛幽閉さる

「荒木村重、謀反にございます」

三木の城は包囲され食糧もつきているはずだが一向にびくともしない。なんと村重の足軽たちが、金につられて米を本願寺へ流し、それが川を伝って三木城へ運び込まれていた。これが露見すれば、村重は無事ではすまない。それだけでなく己れが中国攻めの大將に任命されると信じていた。それが秀吉に命ぜられるとは、そうしたことごとが村重を謀反にと走らせたのでした。

「予があれば目をかけ期待しておったのに、御着ごちやくの小寺も別所に同意とな、なんの小寺如き。官兵衛を説得に行かせよ」

再び陣中に戻っていた半兵衛が「官兵衛殿、ご注意召されよ」「半兵衛殿、何

卒俸を宜しくお願い申します」

「ご懸念あるな、重治しかとお引受け致してござる」

「摂津守殿、黒田官兵衛でござる」「貴殿は、信長殿のなさることについていけるか、比叡山の焼打ち、伊勢長島一向一揆への仕打ちをはじめ、とても民を治める器量ある者のすることではない」

「刃向う者を倒し国を守る、それが戦国のならい。つい数ヶ月前、上月でお目にかかった折、貴殿は全く謀反の気配どころか、信長様のもとで死するも悔いなしのお顔でござった。それがいきなりの変心、貴殿ほどのお方が、なぜ」

「エエイ、なにを申す、それ者共」板戸が開くや、刀を手にした家来たちが。「村重殿、そこまで落ちられたか」

殺し合い、裏切りは戦国のならいではあるが、してはならぬことがあり、その一つが、和睦或いは降伏を勧めに来た使者を害すること。無論返されず城門から首と胴体が別々に投げ出されたり、包囲軍の前ではりつけ、首を落とされた使者もあったが、「命だけは助けてくれる、土牢に連れていけ」土牢は地面を三尺ほど掘った処に頑丈な囲いを設け、ほんの小さな明り取りの高窓があるだけ、日が差さず風通しも悪く、地面も壁もジメジメと湿ったまま、そこへ薄い夜具を直接に敷くばかり。黒田官兵衛絶対の危地に陥ったのでございます。パパンパン